



もう、信じら
れない



ちひろ

HAJIMARI

わたしは1994年5月22日、4人兄弟の3番目として生まれました。体重は3400グラム。母はわたしが初めての女の子だったため、すごく嬉しかったそう。優しい母と仕事熱心な父のことが、わたしは大好きだった。もちろん、兄や弟のことも大好きだった。お母さんと一緒に布団で寝たり、お父さんと2人でお風呂に入ったり、毎日兄弟4人で遊んでいた。幼い頃は、そんな極普通の毎日が楽しかった。

心の闇

兄弟のなかでも特に健康体だったわたしは、大きな病気をせずすくすくと成長していき、小学校へ入学した頃には、身長140センチをゆうに越えていた。1年生の時は毎日友達と遊び元気いっぱい。2年生になると、クラスの男の子からイジメが始まり、それまでやんちゃだったわたしは、どんどん暗くなっていった。イジメの原因は、つぶれた鼻。誰よりも成長が早かったけど、鼻だけは生まれつきずっとつぶれていて、今でもほとんど変わっていない。高くならなかったのは、兄につぶされたから。わたしは、兄のせいでいじめられたのだ。今でも謝ってくれないし、わたしも許せていない。イジメは半年でなくなったけど、鼻をつぶされた時といじめられた時にできた心の傷は消えないまま。3年生の時には160センチを越え、次男を抜いた。そして生理が始まった。4年生で母も抜き、5年生で170を越えた。体調をほとんど崩したことがなかったわたしだけ、4年生から便秘に悩まされ、なかなか治らなかった。中学生なってバレー部に入り、毎日厳しいトレーニングをこなしたけど、便秘は治らず。それだけではなく、またイジメが始まった。毎日嫌だったけど、3年間頑張って耐えて卒業した。耐えられたのは、顧問の先生が唯一味方でいてくれたから。部活をやっている時は怖くて怯えていたけど、普段は笑顔でとても優しい先生だったから、大好きだった。今でも先生のことを忘れず感謝している。その先生のおかげで、どんな試練も乗り越えられたし、何があっても乗り越えられる根性がついた。中学を卒業して、高校は隣町の夜間高校に進学した。普通の高校に行くと、同じ中学の人が絶対何人かいて、またいじめられるから。親の反対を押しきってまで入って良かったと思う。定時制には同い年の子ばかりではなく、入学した時には歳ぐらい歳上の人もたくさんいた。中には70代のおばあちゃんまで。わたしは入学してからすぐに、そのおばあちゃんと仲良くなった。一緒にご飯食べに行ったり、家にお邪魔したり、時には戦争の話聞いたこともあった。周りから見たら、おばあちゃんと孫にしか見えないけど、一緒にいて楽しかった。

心の闇2

2年生の春から回転寿司のキッチンでバイトを始めた。週6日で平日は4時間以上。土日は5時間半以上。仕込み・軍艦・炊飯、入って1カ月で店長に声出しリーダーを任された。だけど忙しさのあまり勉強が手につかず、5カ月で辞めた。その年の11月から12月、酷かった便秘がさらに酷くなり、月1回出るか出ないか。あまりにも出なかったから、電車とバスで2時間ほどかかる病院へ行き、診てもらった。そこまで遠い病院へ行ったのは、近くにあまり良い病院がなかったことと、その病院は消化器内科の評判が凄く良いと、ネットで知ったから。1週間後にCT検査をすることが決まり、そのまま帰宅。2日後、あまりの腹痛に耐えきれず、救急車を呼んだ。他にも重症な人がいるかもしれないのに、救急車を呼ぶのは躊躇したけど、他に家族がいなかったからとにかく呼ぶしかなかった。病院へ運ばれてからCT検査を受け、腸閉塞と診断をくださった。2泊3日入院し、無事帰宅。その間、凄く辛かった。食べるとお腹が張り、ゴロゴロ鳴って痛かったし、1日中唇が乾燥して、食事も喉を通らなかった。夜はさらに唇が乾燥し、なかなか寝付けなかった。朝は真っ白になっててびっくりした。退院してから食欲を失い、全く食べなくなった。3日後にも最初の病院でCT検査を受け、数週間後に結果を聞いた。入院したことも全て先生に話した。そしたら、「腸閉塞を起こしていた腸には見えない。」と言われ、これまたビックリ。その日は便秘の薬をもらって帰ったけど、飲んでもなかなか良くならなかった。体重は3日で6キロ減少。それから年が明けても、食欲が完全になくなり、毎年家族みんなで行っていたおばあちゃんの家にも、1人だけ行かなかった。家族はみんな「食べなさい」と言ったけど、またお腹が苦しくなるような気がして嫌だった。食べなくなってから1カ月経った頃には、10キロ落ちていた。68キロから58キロ。だけど、ある時突然、なぜだか分からないけど、急に食べたくなる時があった。パンを食べたり、具なし味噌汁を飲んだりした。そして1月のある日、カップラーメンのスープを飲んだ後、茶碗蒸しを食べてしまった。それが悪かったのか、その日は腹痛に苦しみ、唇が真っ白になった。後悔した。けどまた、何日かしてからソーセージを食べてしまい、腹痛に苦しんだ。唇も真っ白になり、また後悔した。それから、急に食べたくなることはなくなった。全く食べられなくなって、2月には生理が来たけど、3月には来なくなった。大胸部・首・背中・足の付け根などに蕁麻疹が出て、皮膚科で検査を受けた。急激な体重減少が原因。その頃の体重は50キロ。18キロも落ちてい

た。その頃にはもう、どう食べ始めたら良いの分からなくなっていた。その頃のわたしなグレープフルーツジュースや黒糖しか口にしなかった。親や学校の先生には「食べなさい」とか「どうして食べないの？」とか言われたけど、その度に腹が立って仕方がなかった。両親には「何も分かってきてない！」とか、「少しはわたしのこと考えてよ！」と本気で怒鳴って口論になったこともあった。まるでわたしが、自分から食べることを拒否しているかのような言い方に聞こえたからだ。精神科や心療内科にも行ったけど、誰も信用することができなかった。でも、唯一信用できたのが、最初に行った消化器内科の先生。その人だけは「食べれない」と言ってくれたから。安心して涙が出そうになった。言葉はほんの少しの違いだけど、意味は全く違う。初めて食べれないことを分かってくれた。学校に行っても気持ち悪ものを見ているかのような周りの目が気になり、まともに行けなかった。でも後から友達に聞いた話によると、みんな心配していたらしい。「死んじゃうのかと思った。」「下手に声かけたら傷つけるような気がして、喋れなかった。」と言ってくれて、凄く嬉しかった。でも家族は信用できなかった。今もできない。「ハゲがハゲ」「あんたよく生きとれるね。」と言われたのは、忘れずはずもなく、その傷は癒えていない。余計に学校へ行けなくなってしまった。鬱を併発していたこともあり、週に1回学校に行く以外は、ずっと家にとじ込もっていた。トイレに行くのも、お風呂に入るのも嫌だった。でも、不安だけは感じていた。心療内科の先生に「40キロを切ったら入院。」と言われていたと。本当に切ったら。どうなるのか。入院したら、食べれなくても無理矢理食べさせられる。ほれこそ辛いと思っていた。そして本当に40キロを切ってしまった時は、さすがに焦った。これではいけない。早速次の日の朝から始めた。最初は具なし味噌汁を飲んだ。食べなくなる前は下痢だったこともあり、潰瘍性大腸炎やクローン病などの食事療法を参考にした。最初はスープばかりだったけど、徐々に食べられる物を増やしていった。食べなくなってから5カ月ほどのことだった。

そんなある日の夜、わたしは両親と3人でテレビを見ていた。ゴールデンレトリバーが出ていた。わたしが「動物を飼うとしたら、ウサギかティーカッププードルだな。」と言ったら、その流れで犬を飼うかどうかという話になり、でもわたしは半分冗談で話していました。でもその次の日に、お父さんがペットショップに行ったと聞き、両親は本気だったと分かりました。それでも本当に飼うのか信じられなかったのですが、1週間後、本当に犬を買ってくれました。パピヨンだったのですが、凄く嬉しかった。その日からわたしはそれまでよりも本気で食べるようになり、体重も少しずつ増えていった。でも、問題が起きた。下半身がパンパンに浮腫んだのだ。痛くて歩けないほどだった。近くの病院をいくつも回ったが、原因不明。最初に行った病院腎臓内科にも行ったが、薬も出してもらえなかった。そして消化器内科にも行ったら、「タンパク質不足ですね。」とあっさり言われ、やっぱりこの先生は信頼できると思った。その後は塩分や水分補給を控えたり、利尿作用があるスイカをジュースにして毎日飲んだ。そしたら1か月ほどで浮腫みがとれた。だけど、しばらくしてからまた歩けないほど、両足が痛くなり、どこの病院に行っても原因不明だった。1か月間我慢して、ようやく痛みがひいた。

OWARI

その後は体のどこにも支障はなく、今は元気に暮らしている。だけど、兄弟や親には全く感謝していない。1番分かってほしかったのに、悪口を言われたり、怒られたりしたから。犬を買ってくれたことはありがたいと思っている。でも、食べられるようになったのは、愛犬のおかげだと思っているし、自分が頑張ったからだとも思っている。今でもたまに拒食症の人の話をテレビで見ていると「かぶった(笑)」とか「一緒だな」と言ってくる。わたしは何も言い返さないけど、本当は腹が立っている。中が良かったクラスのおばあちゃんにも「もうあそこまで痩せないでね。気持ち悪い。」と言われたことがあった。それから挨拶しかしていない。わたしが今でも信頼しているのは、学校の先生・クラスの友達・保育園、小学校、中学校から一緒に友達だけである。拒食症を患ったことのあるわたしが言えるのは、周りの人が「食べなさい」などと言わないこと。なぜなら食べられなくなっているから。そのことを分かってあげて、何が原因なのかを考えてあげること。そして、悪口を言わないこと。